



持 18
459
32

消
福
流

重修真書太閤記四編卷之四

水き下の礮の野の二の度の合の戰の乃の事

并の木の村の又の藏の高の名のの事

淺井備前守長政勝りとりたる勇士一三千余騎と二
手よかし信の長の旗本へ切入んと進む處は長政の
先鋒赤尾中条信長の氏家安藤と戦ひ赤尾中条切
勝と見えしかば長政大に悦び進みりし池田佐
久間坂井等らと喰留んとあせども淺井が兵士
乃鋒銳くやり當りのと既に打破らるべく見
えり處へ木下藤吉郎淺井が後へ廻り礮野丹波

同
攻
會
印

大月己日編卷四

守ヶ備へ向て鉄炮を放しけり戦を始む又淺井ハ織田の本陣に向ふ双方牛角の軍にて更小間の陣法も見えけり然るに木下藤吉郎ハ離合の陣法も熟せしむ忽ち勢を二つに分け一手ハ淺井ヶ跡と追慕せしむ一手ハ礮野と戦ひ礮野ハ最前木下切崩さしむと無念におもひ今度ハ猿冠者一塩付ぢやと氣をいひだて勇を振ふ秀吾そやく其色を知て加藤虎之助清正福島市松正則片桐助作直盛堀尾茂助吉晴蜂須賀中村等とともり時分ハいさど面ニ力を盡し戦へりや高名せりや若者共とぞ下知しけり

元龜元年姉川合戦ハ加藤清正福島正則共十歳片桐直盛十五堀尾吉盛廿七歳あり疑ありと中にも加藤虎之助清正ハ人ニ勝てて勲功を顯はとさやと思ひ真先に進んで戦ひ能敵を討捕合の武者をバ追却け勢猛く走り廻り加藤ヶ郎等井上大九郎是を見て武勇ハ去とあがり餘り逸るハ危ふし是に従て諫めけりが礮野ヶ手り萩野弥太郎上村新九郎宮本彦次郎飯森三太夫島田權右衛門あどい一騎當千の勇士を先として五百をのりの士卒真先に進みて突立切立秀吉を目

よりけ無二無三競いのは偏り木下と撃んと欲
するありべし此時木下が馬前ハ木下小市郎中
村弥助青木甚助淺野弥兵衛藤井又太郎以下四五
百人ありてハおろそつども是れ究竟の兵士
ありバ礮野が兵士と待迎え追つ驀つ戦ふと
礮野もろろ之を見て願ふ處の幸りか伊提秀吉
と一勝負せげやと馬と駈寄突つ木下の手勢弱
きハハあつども死狂人の猪武士にせ付ら
る軍頗る難義に見え一處と加藤主從見りや
馬と飛せて馳來り味方と勵む進むやと秀吉
大い力と得自身鎗と取て諸勢を進ましめんと大

事と戦あたり然ども礮野ハ只今爰と討死せん
と思ひ切しとあきバ射共切共事とて一向進ん
て他目もあつ木下勢合ハもや崩れんとせし
時不思議や礮野が隊裏崩しと左右へつと引退
しとこころを如何と見せせは六尺餘の武者一人
黒木綿の組糸にて緘せし鎧小桃形乃兜と着し
が太刀とも脱び大手と開け礮野が勢と引秘で打
居投倒荒廻るるをけり
當時の甲冑ハ木綿組糸にて緘せしもの多し木
村一人ありし余が見一處甲冑三四十小餘れ
り武士の質素とおもふ

礮野が兵士のあきまて何者あきま如期の振廻あど
と声くたに呼われど答も及びず困りし礮野が勢
と搔別く通るり頼木下が勢加らんと
や一處を礮野が手の兵士上村新九郎宮本彦次郎
駈閉り悪ひ奴乃振舞りか只一鎗突留んと馬を
飛せく走り寄りけま件の武者透もあせり踊り
上り上村が鎗乃太刀打とつと握て動りせび
あつと声とりけり引けま上村馬上より引落
るれ倒る處を起し立以取り押へ首を搔切直
し上村が馬に打の首をバ鞍の後輪に結付その
鎗を以て突て廻れど礮野が手乃者周章前後不

覺に崩れと追掛く手の下敵三騎突少せ猶勢猛
く狂ひまぐり礮野弥太郎に向あく五六合戦ひけ
るが礮野叶の引退くと追詰て鎧草摺と手提
馬上し首搔落しその首と手持ぬる荒廻り
然バ礮野が勢勝色見えも此男一人に騷がさ
れ色あきわくまあそりけり秀吉これを見
件の男ハ味方と見ゆが手と合せと援けりやと
下知しけま加藤福島片桐峰須賀堀尾が輩我も
くと一處集り責付く働きか礮野が二千餘
人散ぐり打散れり敗走り丹波守大に怒り怯
味方の有様や鬼神ともつて天魔ともつて只一人

乃敵一左程まで切立らきて逃るる返せ
 と呼ばれあがら踏止りて戦りんとともども崩
 立とる大軍おれを立直とてき術も盡儀野今ハ是
 ヤでとがら一切と馳りて長政織田勢と戦ふ
 透間あき體とるれり丹波守馬と走らせ浅井
 手一馳加け件の勇士ハ猶敵と追て深く戦ひ
 浅井の兵士島田權左衛門と太刀打して上段下段
 一切結ぶ木下使と遣り抑誰人あれば味方と与
 かして敵と打どやばく姓名と告らまるとつ
 せし件ハ男大音声一軍世話しくして式臺を
 なき違ごあき我を加藤虎之助乃郎等一木村又藏

とりよそのゆと名乗一かバ使返りて斯と告その
 後木村ハ島田と打取て木下の陣へて來る加藤
 出向あくこれハ井上と喧嘩一打果さんとせ木
 村おきバ大悦い能と約束たぐず馳來りて
 のりふ殊一只今乃働拔羣あぐと賞美なりけきを
 奉公もりの土産一ゆと二の首と出以清正
 られと請取木下乃前一伴ハ又藏兎とぬいど
 一ツヤを謹ぐヤけりハ先一加藤殿乃厚恩一と老
 母の介抱心の儘に仕り處二日以前一老母終り
 空しくあつてハ七日の佛事を執行しりち加
 藤殿乃御方一參り奉公せやと存一ハ處をねと

てもおろく今日乃軍と承り七日乃供養代はるん
と先取ものも取あへど馳参る道より雑人原
乃首をうり軍仕りたる印を取ていと言上せり
ハ木下大感天晴の働神妙の至と褒美おしけ
るより木村百目と施し井上と再會の喜と乃
共し加藤が手に屬けり

木村又藏ハ清正熊本入部の後城廻り乃時直乃
者の中へ又内の者の入すらざらざる為し押
云付られし歩行乃者あり新美權左衛門と
りし出頭乃もの若黨の直参のその小混を入
とと答りけり口答しりしとく打て捨

と清正後小立べきものとして知行百石あり
其後高麗渡り時生篠と物知行所乃百
姓と言分りて又藏負て身と退き行方不知り
しは元龜元年より十九年後天正十六年
と抱られし今爰に記して参考し備ふ

淺井方總敗軍の事

并遠藤喜右衛門討死の事

淺井備前守長政ハ池田勝三郎佐久間右衛門尉と
戦ひけるが池田佐久間の兵士崩れ立しかを長政
大に勢を得急し進んぶ信長の本陣へ切掛らん

あつて處に思も寄ぬ後々々木下藤吉郎々三千
餘人頼波と打つ責掛うううう大に驚き是と援の
彼と防ぎ戦ふやど頼と切た礮野丹波守打負
つてえて敵方の勝鬨の声夥敷聞えけるよう
淺井が兵士勇氣たゆ戦い疲れ進退難儀なりけ
折ふし淺井が先陣赤尾中条信長の旗本衆と挑
戦い双方手負死人餘多あれと夫とバ厭ふ
乗越く今日と限ると戦へは鋒尖く勝負更に見え
分む信長ハ氣早き大將々々明智十兵衛光秀前田
又左衛門尉利家と呼ぶの横鎗と入ると下知あり
ハ承るううと答へく前田明智二千餘人淺井

が先鋒一切と掛る氏家安藤ささし筋力を得短
急責立まば淺井が兵士崩れ立亂れ合ける慮
へ濱松乃御手に加ふる軍せし仰と蒙りし稲
葉伊豫守貞通彼御手に有つるも果敢敷軍
もせぬ無興氣して引返り來り是も淺井が先鋒
向る軍と挑む伊豫守ハ美濃三人衆乃中へても武
勇勝れ剛將あまば自身鎗と取て馳出百も振
び突く回る明智前田の兵士も稲葉後生と振
舞ハ赤尾中条が備あまか騒ぎたち散り敗走
以然共赤尾と中条ハ聞あ勇士なり踏止りて戦
りんとささしと織田家の大将競いかり勢けり

小十倍一は勿く敵一がとく終一此手を破せけ
 う長政乃手も軍すらう難儀あり先鋒の諸將
 うふ打破らるる敗走す一引長政の旗本よて
 色多き立總敗軍とあり一けり織田方わり勝一
 乃採立く責ければ長政無念あり味方の勢一
 つま一引退き急度向ふを見らる朝倉勢も敗ら
 せし一見え三帽額の大旗小旗打靡きつ走り行長
 政一怒り一堪兼爰一討死せんと馳らる
 と老臣ども一同に爰を大將の討死ありあき
 處一何とと理あく引止退きけり長政の
 旗本も然破せけ一礒野丹波守ハ後陣の軍一打負

ばまどとせめて長政の本陣一切勝をやとおも
 い馳来一に總敗軍とありて援あき術もあ
 爰一死せんも無下憂悒かるる一懸破らん
 返一我手乃兵士五百餘人と一團あり懸破らん
 とありける處一安藤伊賀守道と一討り
 丹波守一もせず馬を飛して馳け一蹴立ら
 せ散こ一あり引退ハ氏家入道入替り漏れ一餘
 とも攻けをも礒野難ふ馳破り馳通ると穉
 葉伊豫守打寄く珍一礒野殿日頃も似を正ふ
 うも後を見せしものあと呼ま礒野馬と
 引返一何とて後を見まきぞ其場を引あふ伊

豫守殿とつのも切に撃てられハ稲葉ハ老功の勇
士あり正面と破られト火水ありてこまを防
ぐ磯野ハ名小負打物達者なり懸てハ切切ハ馳
抜半時ばうその戦ハ稲葉終ハ打破らる磯野を圍
と切抜く味方とこれハ五六十騎ハ討まら然共
丹波守も手も負ひ今ハ是れぞまづ佐和山へ引
返しやうと戦えり馬と閑り打行稲葉が
手の者跡と慕ふんとはまけり齊藤内藏助稲
葉と勧めて追しめ磯野が今日乃振舞ハ凡人ふ
らぢことと追まるとたやすく打捕まらるる却
て味方に禍ありと諫めつ勇り義あり信

あつと譽ぬものうとあつとけし浅井が本陣散
破る勇士多く討まらば織田殿の本陣もは
首ども實檢して其名字を糾けり誰とと知
ど髪と顔に振まらし血を以て面を汚し首一つ提
織田殿乃陣に入見れハ信長床机にかけ居る
小側へ近こ進まけり竹中半兵衛尉の長子久
作重友見答り何者ぞ大將の御座近ハ無禮なり其
首此方へと中ハ彼者ソヤ此首を子細乃直
に御覽に入んと猶側近く進まけり久作怪
敷曲物うあつとつ無手と組組まて彼者持
首と取直し信長と目當まらつと投付ら久

作終に組勝て首と搦實檢に入る信長大に感ぜら
れ且も此者何者あまバ本陣に忍び来り我を討ん
と謀るやらん定りて淺井の侍く名あつとも
あつて其志といひ勇氣といひ尋常の者あつて
生捕る兵士あつて名を問へると下知あつてのけ
る處へ濱松も朝倉勢と駈破り首數多く取持せ
られ信長の本陣へ入御ありてハ信長まほしく悦
び今日の御働比類あく覺ゆ御勢三千餘りて朝倉
一萬と切廢けらるる古今その例と聞どいと宣
へバ濱松もて左ふ仰らるる武士道と疎き朝倉
勢に向ふておといの外に切勝ゆると其働き故

いひの敵乃弱きと爲ありと仰らるるハ信長
も御手柄といひと宣ふと前將軍光源院殿秘藏あり
天下第一長光の太刀と進上ありけり抑この太
刀ハ義輝公御生害の後三好等が取かくせしと信
長乃手傳へりありそのうち實檢の式終り首帳
と付らるるに淺井朝倉の兵士三千二百人討死
味方の討死一千餘人とぞ記さしけり然とも名の
定りあつて首多く中にも只今の曲者を誰あつん
と頻りにゆくおとけしけり處に安養寺三郎
左衛門と生捕りきたるこの安養寺ハ長政の旗

本陣日記編卷四

十

本に在て諸卒と下知して居たりけるが味方敗れ
め聞かばまづ長政と落さんと只一人踏止り
て戦ひけるに敵を雲霞の如く十重廿重に取圍
遁れ出べき透間もあく如何にても一方打破り
長政に追付んと多勢に向ひて戦ひける小安養寺
に乗たる馬鐵炮の中りて倒まけるより心あら
ずも安養寺落馬しける處と折重ありて終に生捕
りてしきたりけり

重修真書太閤記四編卷之四終

重修真書太閤記四編卷之五

安養寺三郎左衛門尉誠忠乃事

并木下藤吉郎小谷發向と進む事

淺井朝倉の兩家織田濱松の威風に吹靡りしれ念
あく總敗軍とあり織田方へ討捕し首共多くあり
とてその名定りあり誰か問んと思召ける處
へ安養寺三郎左衛門尉生捕とありける由を聞召
りて究竟乃とあり早く御對面ありて一とて安養
寺と召しりか即木陣へ差出せしに信長見あり
とてその儘すの縛の繩と解せりし傍へ召居久し

ありぬ安養寺抑某長政と親しくありし其方が
周旋ありしに不慮も如斯確執を起し弓箭及よ
こころを是非あけし但此事某が私の遺恨を晴
んとしその所為にあらず天下の爲は公の命を以て朝
倉義景が不禮と糾をこき爲越前へ出馬せしと長
政憤りて事の爰に及べりあれども朝倉が罪ハ將
軍家より罰しよふあはれ某が私の計議ありし
長政こころに一味せらるるは共々天下に背く道理
あり然るを其方聊も諫めざり如何ある所存ぞ
や今如斯ありつと共元來其方を惡しとおとりね
ハ今より我旗本ありと忠義を盡とべしと仰ら

きしに三郎左衛門尉承り殿乃御芳志ハ中盡し難
く存ゆ一ども殿の御家人たらんもの敵に虜れ
敵に助けられし剩敵は仕へんと善く思召は長政
の心中それ違ふら御推量あましく且
又如斯云甲斐あり拙者も候へとも二人の主
仕ふべき心ハ持やとす長政が殿に背き察らせし
事異見度ニ出ゆへとも長政乃父下野守久政
兎角先代亮政と朝倉と契約仕しとを忘まりね
某ありとちとを一圓聞入中より斯首尾小罷成
てハ早く首を召まひて此上の御芳志と奉存と
ちけしは信長聞食其方ダ昔尤あり實左もあり

二門己日編次

つべー但我手へ討取一首どとの中へ姓名たー
あらざるもの多し主の爲に命を落せし忠臣の印
もその終に打棄んも本意あらは其方が見知り者
あらば名をたし小告いしとくまづ竹中久作が
討一曲者乃首と見せしハ三郎左衛門尉一目見て
双眼に涙をうけ是を御聞も有べー御覽せー
事も有つらん遠藤喜右衛門尉直繼にくゆあそれ
日頃乃詞を違へど討死しゆそや喜右衛門尉此
度も久政と種と諫りゆへどと久政ありと是と
用ひも昨夜傍輩ととに語そけは明日の軍を
味方敗軍せば如何しもして織田殿の本陣一忍

入大將を一撃し撃せんものごとしやせしそや往昔
殿の始て佐和山へ入御あり日喜右衛門尉久政
長政よりせし織田殿ハ天下に御旗と立ちし
き大將と見奉るし左もゆらば朝倉最初に誅罰
せられあんその時當方あり余所に見るふべ
うらず然ハ終小織田殿と弓箭及ばんと眼前に
ゆ早く御計略ゆへと諫りゆへと久政長政これ
を用ひを果して如斯首尾に及ひゆ喜右衛門尉一
人時に諫とも異見とも中てゆその外に誰一人
又改し一言中者もゆゆ浅井の股肱羽翼とたの
し者としてゆひに斯ありし上を浅井の滅亡遠

うらばと存し其も早く身の暇と下さきゆへ
と中あを信長儲を名に負遠藤喜右衛門尉が年久
く立く見忘きしや又作らき首取しと大賞
美あしり

竹中又作重友ハ半兵衛重治の弟と系圖より
重治今年廿八歳子息ありとも幼稚ありべし又
四戦紀聞し遠藤喜右衛門尉が提たる首ハ淺井
方の侍三田村莊右衛門が討死したる首と取し
ありしつゝ且又作重矩けりりる遠藤を見
知くことと討しつゝ
爾後織田殿仰らまけりハ此勢に乗て小谷へ押寄

あハ只一時責落んとおろふあり其方何とねと
あぢやとありしハ安養寺打笑て淺井が爲に死
と急ぐ某に軍の進退を問せり殿乃御意を他
國にて沙汰し殿の表裏と中べり然して某
所存とすも臆したるに似たり殿の思召處ハ
長政今日敗軍し能武士多く討死してハ此機と
脱し小谷と乗取へくとの御軍略はさるあり
ら久政に從ふく小谷に留守せ侍のく三千餘
人ハハ一其他長政に從ふく討死せ者共の子
や弟あんと小谷小遺せりものも千餘人ハハ一
長政と共に戦ひ勞れし兵士も三千餘人ハハ一

是等と合せ七千計の兵士、要害ありし小谷山に籠りて、兵糧玉薬八年來貯へく、一は乏しうり、半年や一年ハ持味へし、斯く三郎左衛門、如き臆病者なり、まをゆけど殿の御勢も今日乃戦ふさぞう、困疲いべく炎暑の時、ハあり、氣力とてに衰弱し、直に小谷へ押寄せ、果敢敷ハ働くべからず、勝てハ胃の緒と占る共中諺のゆゑのと申せ、ハ信長實を思召けん去ハ一兩日休息して取掛申べしとありけり、承けり安養寺にけるを殿の御勢休息仕り、浅井の勢も休息仕り、殿乃御勢ハ勝軍、心

誇り敵を侮り、浅井方ハ朝倉義景も馳加はり、越前勢怯弱あり、荒手あり、然らば御合戦如何ゆらん、斯上某小御尋の事も、連、首を刎られ、様仰付られ、信長大に御感あり、安養寺ガ中處道理あり、去共我思、小昔あり、汝と返、遣り、長政と助け、再び忠義を盡し、安養寺と送り、還、ひけり、信長心中の疑團解やら、久政と共に留守せ、兵士三千餘人もあり、言つ、詞と録返、思案あり、窮鼠還りて猫を噛と云、一先凱陣の後復重なり、出陣あり、決定ふ

一ありあつたりし總軍勢へその由を觸りし此時木下
 藤吉郎ハ淺井勢と追散しつとを問者の紛
 且込し者もあつたりと能く吟味しけるあつたり存
 乃外ニ隙入ありし本陣へ参向大遅とせしとい
 一と定めて合程を小谷發向乃手配定まらつら
 んと思ひあつたり参上しつとをいりに總軍
 一同小休息の休ありしは秀吉本陣へ伺候し何
 とて如様ニ長閑小すし備はどや刹那も機小後
 時を一由旬の急を生じ長政小谷に逃入し防戦の
 備はずだ定まらざる處一進發ありしを神速の
 勲功と立ゆべけさ早御打立ありて然る言

上せしは信長打笑もせし藤吉郎日頃も似
 ど逸り過る何事ぞや昨日合戦勝利を得つと
 も時ハ炎天あり數度の大軍あり味方もさぞか
 疲まららん疲れし味方の勢を以て要害に楯籠り
 地戦案内の者と軍せんし良將の策ありし殊に
 長政あを合戦小勞せしあつたり下野守久政が新
 乃士卒少しとも二三千ハありし兵糧玉薬ハ云
 に及りし山嶮し谷深く峯を回さハ美濃越
 前へも通路あり容易に押寄て戦とありしを勝
 きしハおほくも其方常にわつたりし十分
 は必禍の根と此度の合戦を味方十分の勝利あり

因て軍と収りて歸陣せんと欲すと宣へば秀吉ま
 とにあきれきて夫を如何ある思召ぞや事十分あ
 るは禍ありとて討べき敵を討まん軍は勝べき
 時ハハ味方疲まると宣へども敵はた勞し
 て然を恐怖したる味方の兵士は疲れども勝て
 鋭氣盛あり敵ハ勞せし上小敗軍したまは氣力衰
 へたり盛ありと以て衰ありと討必勝の機と云へ
 一要害堅固あり玉薬沢山あり城と落は術乃ふ
 きあらば岐阜大河内とハ何となく落しあひしを
 や又政ハ軍法に疎く兵機としらば假令バ幾萬の
 衆ありとも云に足は三千人の兵士と率ありとも百

人もよく其使令に應じしものありし如く如斯
 大事の機関をめぐせし事の口惜と抑我君にのり
 とを中勸り奉りしものありし一惡を奴ら天の
 與ふとと取ざれば却て其禍を受るとハのりしを
 や中べき小谷落城せば朝倉ハ自然と滅亡仕るる
 一然バ越前も一舉に平均仕るべきものも能
 く御思案ありし然と上りかども信長と
 かく疑心ありし終に凱陣小決しあは木下も力
 及つに己が役所へ歸りけり
 一書に此時木下が如く信長直に責付あり小
 谷半時とを誅すとのあり實ハ又政

と共ニ留守セリ軍兵二百餘騎に過ハ然モワグ
モも老武者ノ果敢敷ハ働キ得ルモノ而巳
あつて安養寺ガ三千餘人と言ハシ信長
忽例ノ疑惑と起シ凱陣あしりふ三十不爛の舌
頭ニ淺井三年の久敷と保ちしと辨士の所爲可
畏トリムベシ

秀吉横山城責と望

并横山城兵降参

木下藤吉郎きの下ふとうきちらうは信長更ニ用ひしに歸陣ありしに事決せしは秀吉獨本意ありしに思ひける餘
織田殿と諒り小谷進發を勸む

重ねて言上しけるハ姉川の御一戰御勝利
御威光江北に加ふるハ去しあぐ一城も
落させし御凱陣ありしと近頃残念ニ
存じ奉りし横山乃城と責おし味方より
軍兵と籠置せし味方重ねて御發向乃節足溜
あも成し殊ニ横山は小谷の咽喉にて要害
あり故此度も味方の兵士數日を懸て責
かどと終ニ落し得ば空敷手負死人の負の多く
して寸功も立しゆいと返さくも残り存
ハ淺井も此城かくて内ハ埽目と丈夫に存じ
心強く働さしゆいと此城と此方一攻取しハ淺

井が爲^た腹心^{はらこ}乃^は病^{やまひ}と發^はし自然^{しぜん}と小谷^{こたに}の痛^{いた}と成^なり
 らんと必定^{ひつぷう}に由^{よし}是^{こゝ}と責^せ取^とり事^{こと}某^{たがひ}に仰^{おほせ}付^{つけ}らる^りま^はり
 暫時^{しばしば}に責^せ落^{おち}しゆ^ゆと荒^あ増^ま術^{じゆつ}と中^{ちゆう}上^{じやう}の城^{じやう}責^せ心^{しん}小^{せう}
 長^{ちやう}實^{じつ}を思^{おも}ひ呂^{りよ}其^{その}方^{かた}左^さ程^{ほど}を思^{おも}ひ横^{よこ}山^{やま}の城^{じやう}責^せ心^{しん}小^{せう}
 任^{まか}じゆ^{じゆ}と許^{ゆる}されけ^け多^{おほ}に^{おほ}り木^き下^{した}大^{おほ}に悦^{よろこ}び時^{とき}刻^{こく}
 とほろほろと申^{まを}の頭^{かぶ}は^はり晝^{ひる}の暑^{あつ}熱^{ねつ}と忘^{わす}れ計^{はかり}り涼^{りやう}風^{かぜ}
 起^たりて快^{たげ}く是^{こゝ}究竟^{きうけい}の時^{とき}刻^{こく}あり城^{じやう}中^{ちゆう}の者^{もの}ハ木^き蔭^{かげ}
 に睡^ねり暑^{あつ}と避^{よこ}るあ^ある^る帯^{おび}紐^{ひも}解^とれ油^{あぶら}断^たせ^せ處^{ところ}
 へ押^お掛^かと透^{とほ}間^まあ^あら^らせ^せ短^{たん}兵^{へい}急^{きゆう}に責^せ付^{つけ}一時^{いちじ}責^せ攻^{こう}
 落^{おち}とべ^べ各^{おの}々^{おの}其^{その}意^いと得^えべ^べと下^{した}知^ちり^り三^{さん}千^{せん}餘^{じゆ}
 人^{ひと}と引^ひ率^{りつ}し横^{よこ}山^{やま}を^を馳^は向^{むか}し抑^{おさ}最^{さい}初^{しつ}より横^{よこ}山^{やま}押^お

えと^えし^して^てさ^さ置^おき^きける織^お田^た上^{じやう}野^の介^け信^{しん}包^{ほう}丹^{たん}羽^う五^ご郎^{らう}
 左^さ衛^ゑ門^{もん}尉^{ゑい}長^{ちやう}秀^{しゆ}乃^の許^{もと}へ信^{しん}長^{ちやう}凱^{がい}陣^{じん}乃^のと觸^ふら^らぬ^ぬ
 了^り小^{せう}雨^う人^{にん}も備^びを引^ひ揚^あ本^{ほん}陣^{じん}を引^ひ返^{かへ}し^しあり^り
 横^{よこ}山^{やま}城^{じやう}中^{ちゆう}の者^{もの}は轍^{ちやく}魚^{ぎよ}乃^の水^{みづ}に遭^あひ心^{しん}地^ぢして聊^{いさ}志^し
 と延^のび思^{おも}ひ晴^はり實^{じつ}も木^き蔭^{かげ}の涼^{すず}と^と澗^{たに}合^あ乃^の風^{かぜ}と
 待^{まち}あ^あら^ら小^{せう}谷^{たに}の安^{あん}否^ひ心^{しん}元^{げん}あく木^きを^を居^かた^たり^り
 朝^あ倉^{くら}打^{うち}負^ひ越^こ前^{まへ}引^ひ返^{かへ}し長^{ちやう}政^{せい}も敗^は軍^{ぐん}あ^あら^ら遠^{えん}藤^{とう}
 以下^{いげ}歴^{れき}と多^{おほ}く討^{うち}死^しせ^せ由^{よし}と聞^き二^に度^ど驚^{おど}ろ^ろ然^{しか}る^る
 ハ當^あ城^{じやう}と持^もつとえんと覺^{おぼ}束^たあ^あし去^さりて^ても當^あ城^{じやう}押^お
 えの織^お田^た方^{かた}乃^の兵^{へい}士^しを何^{なに}故^ゆに引^ひ取^とり^りや^やらんと不^い審^{しん}
 おと^おと^とと^と尋^{たづ}ね^ねべき便^たり^りあ^あら^ら茫^{ぼう}然^{ぜん}として居^かた^たる^る處^{ところ}

へ木下り二千餘騎責鼓と打て責來り貝と吹立鐘
 を鳴しけり山谷響き合くおのたゞ
 ぞ聞えけり城中ありは二度大驚き朝倉打負て
 本國へ歸り淺井敗北して小谷に籠りあくを誰り
 當城と見つぐべし今ハ遁まぬ處を尋常軍して
 討死せりやと城の大將大野木土佐守必死ありつ
 て下知したり相從ふ者共も此期及ぐ降を請と
 を寄手更に許をまじぬあつひは出城して高手小
 手に縛りられその上へ首を刎られんる力カの
 續くたけ防戦しつと死に切死小死やくと勇
 川殊々味方ハ此四五日休息したれば氣力未だ

衰へず寄手と昨今乃軍に疲れ別々暑氣も勞せり
 者共あり只今貝鐘を力すのりけ共その身草
 臥たらんるを乃と恐るべきはあらず面と役所
 くと大事に持のたけをかきあつと評定しけ
 見れば三田村左衛門尉野村肥後守つづとも此義最
 あつと一同し志を定めて防ぎけり木下藤吉郎ハ
 のこの如く軍威を示しけり城中却て防禦の儲
 とあつと見て然バまゝ爲べき様とあれた
 は此城一ツ責落さん何の難きと有んあつと
 と如斯必死あり者共と餘り討んとせば味
 方も若干討つべしや此城を籠るものと遺

うあく打果したるをも味方の左の強にあり
 ともありや又このまに爲置たりとも何程のこころ
 あくまきや但士卒を傷め計略を以て城と請取
 たりと諸勢を下知し三千餘人と横山の城下まで
 押詰させ関を作り鐵炮と打掛けしハ城中よりも
 鯨波の聲と合せ矢狭間を開き鐵炮を打せくころと
 と防ぐ良時移りし時木下獨り馬を馳來り織田殿
 仰せらるる昔あまは合戦と止むべしと呼らるるに
 寄り寄手三千餘人攻口を退く軍を止むその時秀
 吉只一人大手の城門際一向の城中の大將又一言
 中へきしものゆと言せけるにうり大野木土佐守櫓

乃上見まいど何事ぞと云ハ木下淺井朝倉の兩
 勢姉川の戦は打負人數多く討死し殊は朝倉ハ本
 國へ引返したれハ誰ハ當城の後援ともあり
 き如斯とらるるに志と固く籠城ありし忠義の程
 ハ頼母數ハ一とも淺井殿小谷又入あり後織田
 殿軍と還りありハ深き意のハあり一度ハ軍一
 公方の命と重んじ一度ハ軍を退く縁者の好と
 全く去は長政朝倉と手切りあり信長と同ト
 く將軍乃命と守らせあり事順し道正ハ朝
 一姉川の軍ハ朝倉打負淺井殿を見捨て越前一
 引返しつぎはち朝倉方より淺井殿と手切せし

あらと何と始終信長と仇あひあはさるべきや遠く
 らず浅井殿も信長と和睦ありて然あらん事を
 合戦實は益ありて一而二をハ覺悟の事なれ
 士卒よことに罪なき者を早く開城ありて小谷一御
 越へて一人ありてと過ありてと謂せけしは
 城中一同にこそ悦ぶと云々と大野木一人同心
 せは是信長の調略あり我等に開城させ路次々
 討べきためと知る誰ハ左様の淺く謀にめ
 るべきやとて木下は答へけるハ浅井父子滅亡
 我等が主と頼むとのあはさるは城を開ひて落
 行んとせし長政未だ存命ありて何とく此城

と出れば武士の道ハ左様とあきまの事として引入んと
 しけきバ堀尾片桐大に怒り其義ありハ一責攻め手柄の不
 どと顯るるべしと匂うける木下制して二度大野木に向
 ひ貴邊の言ふ處理ありて却て理は逆へり抑信長
 と何の遺恨ありなき一向將軍の命の背き難き小縁者
 の親暱と放まて弓矢と執りて然バ實は長政の為と思
 つり早く開城して長政を代り將軍の命と重んぜらば
 面々の忠義あり長政思ひ返り朝倉と手切信長と同心
 ありて浅井の家繁昌も一僅ある義理と思つて大事の
 道と踏違へるあは開城ありて人を欺きて殺すべき程臆
 病の秀吉ありて但各々迷の雲霧晴やらず城と枕と討死

はあふとも小谷の強よあふとあふび却て將軍の命に背
も印を顯して弥長政の爲よあふのめじ然共得心あふ
爲方ふ籠城の侍能此道理と思案して後悔あふとあれ
と教訓けつらう大野木土佐守惡い木下が言條うあふと
三百餘人と勝く切て出たり秀吉然あふとて大勢の中取
込一人も漏さぬ是と打取其後城中に向ひ大野木勇あふと道
理よ疎く自身と減し士卒と害い抑何の益うあふ能と思慮
と廻しあふと謂せらば野村も三田村も實然あふと同心
城と開て降参しけつらう秀吉約束少も違へば籠城の士
卒よ盡小谷一歸しめ只城よめ請取て木下が勢と以て堅
固よ之と守り借後木陣一斯と注進たうけり

太問記四編卷之五終

重修真書太問記四編卷之六

三好黨野田福嶋ふ出張の事

并淺井朝倉坂本へ出陣の事

横山の城木下り調儀の如く落去せしは秀吉速よ
織田殿の本陣へ注進と信長聞食一段と機嫌よろ
しく神速ふ一城を得しと御感淺ゆさる由を仰
出され其夜の姪川の東ふ本陣を居られ翌廿九日
いふ陣拂あるへけしとも横山既ふ味方の者と
なる川は是を守りぬのあふ有へうう誰を
あ爰よ残し置んと其器量と擇らぬよ小谷あり

近く越前街道といひ尋常の輩の能守るべき處か
ら孫を某守りいふんと望みのゆゑ又此方より
守りゆへと仰出さるへに仁も差當り木下より外
に有べうといひと思食且木下う籌策あて取れる城
なれいとて秀吉と召て横山は城代を置いてい叶ふ
や然る難義の敵地なれば誰彼と云ふ及らぬ
其方これを守りゆへと仰られしより秀吉謹て
申けるやう秀吉身不肖ゆへとも長濱ふ在城仕
りゆへちこれを兼守りいふんと難くゆへに其
上調畧仕りゆて淺井父子小困窮さを後日の御合
戦よろしく様ふちゆへと御請申さうい信長

大い悦ひぬ叔父の佐和山の城は磯野丹波守引
籠り堅固な籠城しつゝをそのまゝに棄ちらばん
も口惜りるへは是をも攻つと評定ありける
木下申ける磯野へ江北第一の侍なり敗軍し
て引退けとも弓箭の道理を明らかし知たる武士
なれは是を責むとも横山の如く容易くは落去仕
あまの只此儘より置て佐和山近所は要害を構
へ御人数少々残り置といへる龍ひち磯野勢屈
し終る降参仕るへと計らひけるより信長
も是も同しぬ即佐和山の向ひは百々屋敷と云
處を要害とて丹羽五郎左衛門尉長秀を残り置

大問已四編卷六

二

と隨分謀と廻らし磯野を降参させると下知し
ひ信長よの岐阜へ凱陣よしと

百々屋敷と云へ百々加賀守といひし者の宅地
なり今よ其子孫坂田郡黒田庄本御村よありて
金瘡の妙方を相傳せり

木下藤吉郎へ千五百餘人よて横山の城を守り長
濱よの竹中半兵衛重治を城代とて浅野彌兵衛
と共よ是を守らしむ浅井備前守長政へ妙川よて
敗軍し多くの味方と討と去共と頼と朝倉へ越
前へ引返し横山の城をい落され小谷の城中巷説
様々よして穩やうなりし責て横山を取返し籠城

の者の銳氣を助けちよとて横山を責せとも元よ
う城責ふ妙と得し木下よれへ守るとも亦尋常よ
超たりしうの小谷勢おし寄て戦へとも寄手の損
をともめりて城中とこよ弱る色ちよげよ浅
井も是非なく攻んとともを寺閑より置けるよ
より木下時々打て出小谷近邊と放火し監妨しそ
敵を驚らし手軽く引上げるよ浅井方無念よ
あめよとも爲へる様もち怒りと押えて居たり
ける爰よまの去年の春本國寺の御所へ押寄て將
軍家を襲ひ奉りし三好黨木下よ敗らし四國へ逃
下り時節を見合を居たりける浅井朝倉信長と

合戦とる由を聞出し、隙ありと思ひけし、三人衆并、四國を遺り、一族等を語らひ合を上方へ攻上らむと評定せし、三好日向守申けり、我々足長渡海して貴上とも五畿内悉く敵となりたれ、少時めても足を溜へる処なく去らば、敗軍の度々船を取乘四國より落延し、斯へ何時もても勝利を得んと覺束なり、然へば攝州の要害を構へ、根城となり、京都を窺ひ、或時へ進て戦ひ、或時へ退て氣を助けん、味方疲るるに、敵へ却てらるる、加之石山の本願寺、顯如上人の日頃信長と不快なり、承らるぬ、顯

如上人と語らひ、門徒等を味方となさば、在陣中、兵糧以下雑事、事々々々、我々討て出、淺井朝倉の氣を増て、信長は駈向ふ、信長兩方、敵を受へ、何れも猛々とも困窮せん、疑をり、然して要害何處か善く、と按とる、攝州野田、福嶋、究竟の地なり、前は大沼、廣くして馬の駈引、自由を得、南は淀川を廻らして流深、後、海、小續、さたれ、四國の通路、心は任と、早く彼處に打て、要害を構へん、信長衆、左右、寄來る、數日を経、中よ、要害も成就と、一、萬、一、信長、打出、た、朝倉、淺井、と、是を討べ

大陽言口録卷六

四

ありと計らひけり。岩成篠原松山の人も
 此義尤可然と一同。細川六郎同掃部助三好日向
 守同山城守同下野守岩成主税助松山彦十郎篠原右
 京進とて元亀元年七月廿七日一万三千餘人の勢
 同心して野田福島に出張に
 野田福島と云い攝州西成郡より蜷川の北を
 福嶋村勝樂寺の三好出城の跡といふ大坂
 高麗橋より一里といへり
 要害堅固に構へ石山本願寺上人を頼こげり。兵
 糧扶助の事へ承りて一味同心の義へ思ひも寄

こと返事あり。三好黨糧料を得し。籠
 城の儲蓄して勢頗強大なり。畿内以外の外は騷
 動に

一書よ岩成主税助三好山城入道笑岩齋同日向
 入道北齋同下野守一万三千餘人よて天満森小
 陣して野田福島小要害を構へし。いへり
 京都より岐阜へ早馬と立られ注進擲の齒を引り
 如く信長此由聞食急と攝州へ發向し。今度より三
 好黨と誅罰とくめれとて早々陣觸りし。あひ美濃
 尾張三河伊勢近江の軍兵三万五千餘人の著到し
 て八月廿日岐阜を進發ありて上洛す。満先將

軍家の御所へ出仕し今度三好黨蜂起仕りい盡く
誅罰をとんとんの後患絶る時なりけり御所様あめ
頃て御出馬あつてをらねつといひ言上し信長へ直
し摂州へ發向あつて中島より下向しあひ三好と合戦

江口村小織田殿の證文と傳ふ其文は渡舟之儀晝
夜令馳走之条當村之事乱妨狼藉一切非余除之
若狥之儀有之者可成敗之狀如件元龜元年九月
信長江口村船頭中とあり又一書は九月七日信
長天満森川分口より向城を構へ平手監物佐々内
藏助塚本小大膳佐藤六左衛門と籠置石山の西

籠の岸より齋藤新五郎中川八郎右衛門稻葉伊豫
守と籠たりと云
石山本願寺上人と朝倉とい親し間柄なれし時
節の使者絶ることなり然るに三好黨信長と合戦し
て信長勢頗難義なるもの朝倉義景の家老とも聞
請て天晴能時節うあ前より三好黨の軍強くして合
戦難渋なりんより後より淺井と申合はれを討ひ信
長如何に猛しとも前後の敵より取込らして狼狽を
其時石山の門徒より横槍を入るより十より九
川信長と打取し急を淺井と牒合を御出陣然る
しと勧めしより越前より江北へ使者を立評定

あつげりる石山より江北の門徒へも通達ありけり
あつげりる浅井備前守大悦ひ軍勢を催促し四千
餘人と引率し九月十四日小谷と出馬ありて坂本
に着陣せり

小谷より坂本より十五里餘ありて二日路あり
越前一乗谷より四十餘里ありて

朝倉義景へ同十三日一乗谷と対立して十五日浅井
と共に比叡山八王寺峯坂本堅田小陣と取柳山門
の衆徒へ元より朝倉より師檀の好意くして信長
への遺恨ありて因て山門浅井朝倉と馳走ありて
兩家の威勢京洛中へ振ひ實に懸敷を聞えり

一書み九月十三日淺井長政小谷と發し塩津越

ふ十五日高島郡伊黒城より着陣し朝倉を待合を

けるふ十六日義景伊黒より着ありしうわをれり

う比叡辻八王子小陣と取と見の伊黒城へ大溝

城の西ありて加茂川の南あり伊黒より坂本へ

一日路ありて

宇佐山城合戦の事

并織田九郎信治森可成戦死の事

其頃宇佐山の城あり織田殿の舎弟織田六郎信治

森三九衛門尉可成を後見とて相添らんと可成

組下青地駿河守武藤五郎九衛門尉肥田玄蕃同彦

右衛門等と共に守り居たり但森三九衛門へ織田
 殿より從ふく摂州へ下向せしう浅井朝倉蜂起を
 宇佐山の城心元より急ぎ馳歸り心を添ふとの義
 に返されたるの實も摂州にて評定せし如く兩
 家の軍勢雲霞の如く出張り義景の着陣を待あひ
 た日を空敷りさんも無益あり宇佐山と打落し
 軍神を祀らるゝゆとて浅井長政朝倉式部大輔同中
 務丞押寄より鉄炮をたらち掛てあをを責
 宇佐山といふい志賀の郷の内より穴太の里に
 續きさう坂本よりい西南に當る
 こゝめい足輕をうけく糴合けるを森三九衛門尉

打て出散々小切あく敵多く打取て引入しうい
 逃返りし足輕とも城より切て出武者勇猛なれ
 とも勢いこの多めりゆと告しうを然ち兩家の
 勢より惣責し責て揉落んと翌日浅井備前守長政
 三千餘人幸崎濱より押寄より朝倉勢六千餘人穴
 太村より押寄追手搦手九千餘人よりなる宇佐
 山の砦を責落さんと揉たりけり城中よりとも兼
 てめくあらんと思ひ設しとあれい森三九衛門尉
 へ一千餘人を率ひて町屋の裏より出張し五百餘人
 とい道の左右より伏置鉄炮を持を會圖次第より打め
 くへと約束し自身へ五百餘人を召具し町口を

放して備を立たり然るに朝倉浅井の勢目小餘
大軍のれい森り手の者共案に相違し加程の大軍
あてい有まと思ひし存の外に事うると聊猶
豫して進むもやらは可成も心中に驚きありし
も屈を味方に向ひ軍の兵の多少に因て只面
振と進むと美とに我を本よとやと真先は駈
進朝倉の六千餘人森り五百餘人を真中よ取
雨霰の降如く鎗の鋒を揃へて揉たりし流石の
三九衛門尉暫あしらふと引を朝倉勢勝ふ
乗て追掛たり可成も取て返り取て返り戦を
しうとも最初の軍は従兵氣後とて立直ると

間のちり打てい走り走りて打漸々と町中よて
朝倉勢を誘引を今を兼て約束の塩合よと下
知しけい伏置たる五百餘人の鉄炮を打立く責
立るより朝倉勢をこし色めを見へけと三九衛
門をい勝たるを若者ともと下知されい森り即等
道家清十郎同助十郎尾藤源内同又八郎あし聞え
たる勇士森り劣ら取て返り四度路よ成し朝倉
勢を無二無三よ突立をい朝倉勢右左よ突崩され
散々よありて敗走し三九衛門のれをい何處ま
てもと追うけたり浅井の兵士搦手より森りや
と打留んと三千餘人雁行し列ねて駈向ひ森を取

大問記四編卷下

大陣言曰終者一
籠打んと森敵と前後に受て叶くとや思ひけん城
中さうと引退くと朝倉中務丞山崎長門守魚住備後
守ととももたの寄來り森を中ふ取圍て戦へ可成
必死とちるを突合たり森が即從へ主と遁さんと朝倉
勢に向ひ息とも繼と責たり可成今へ是をそなく討死
せんと思ひ切て猛虎飛龍の如く振舞へ朝倉勢をそ
み突負ぬへく見へ一処は淺井備前守長政森をいよく
見知たり餘をまると進とけるよと可成り一千餘人残り
少あは打あさつとも大將九郎殿の御上も心元ふ
一早々引返へ一と下知して大形城中へ入果けとら
三九衛門尉今へ心安へ縲引と引とぬとおめひ一処

一朝倉勢取てへ城中へ付入んとひめくと可成
打残され一者共と前後左右は從へ大勢は駈合と六騎とい
切て落し十餘人ふ手と負とその身も多く疵へ受たり
人手よりらんありいと馬より飛て下腹搔切て死した
うけり行年四十八いよ盛りよおと侍大將なり森
也即等道家尾藤何由主は劣り軍して同一枕と討死
と此時城中より大將織田九郎信治相從ふ面々武藤
五郎左衛門尉青地駿河守肥田玄蕃亮等と先と一
千餘人持口と固めて守り居けるり森町口は出て合戦し
朝倉淺井の大軍ふ取圍やれ軍難義なるを
見て信治下知し多ひけるり森敵は取やれ戦ととふ

ふ烈いげなり余所を待んも心苦し討出て助けぬ
と思ふなり我を思はん人々の繼ゆくと呼らり捨て
て出る武藤五郎左衛門を止むとも信治更し聞
入と一鞭あてて馳出とい青地駿河守尤左を有たさめ
のちあれいささかあへといふに主従三百餘人切て出る
武藤の役所を守りて手配りあり居たりける信治を
町中へ打出見ありし可成りや自害しと死したりし
ありし口惜今とらう早うとらへ一処に討死とらうけ
るののをとらう大勢の中へ面もあらひ切て入多く敵を
亡りつとも味方も大形手へ負川一足も引な引と
恥しめあひ終る乱軍の中へ信治も青地も討死たり

浅井朝倉首共實檢し織田殿の連枝と云侍大将と云是と討取
しと物初はと悦び頓て城へ押寄責し共武藤五郎左衛門肥田玄
蕃能防戦少し弱色と見守手多く損じたりけり
此城を急ぎ落しきと捨置たりとも何程の事なると
て人数を引上天津の在家と放火を軍の勢と示し近日に京入せんと
猶も比叡辻の陣を取て居たりける信長攝州を此由と聞召前
の三好黨要害を籠て戦と挑後浅井朝倉打て出京都を
攻んと謀る兎も角も京へ入立て、事彌難義ありて早く京
へ引返し朝倉浅井と退治し備後攝州の敵と追拂ふべきの評
定めて信長上洛の用意とせむいづ横山の城を差置し木下藤
郎と摂州陣へ呼下し石山本願寺と謀り三好黨と押へしと仰付ら

是九月廿三日信長中島の陣と出御し、直に將軍家へ京都へ
 還御ありしに、信長山科より大津へ押通り、直に坂本へ向ふを命じ
 一書より宇佐山合戦又ハ坂本合戦と云元龜元年九月十八日又起
 十九日の未明に淺井ハ辛崎濱より朝倉穴太村より寄付を見
 森町にのりて出淺井朝倉の侍と戦ひ、猛勢の中を包み、終
 に討死せり。兩家の軍勢、宇佐山二丸迄責入つて、共武藤肥田
 能防戦す。是より左右あり、落し得ず。兩家の勢、共其勝つ。つ
 と知り、人數を引揚せし日、大津を放火し、廿日に醍醐山科迄濫妨し
 借山門を籠り、又信長摂州より三好と對陣中の始末、本願寺と
 の進退ハ別々書あり、是ハるに、あつて、

重修真書大問記四編卷之六終

